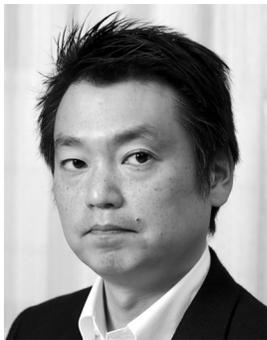


寺院を活かせば地方が蘇る

―消えゆく“社会資本”の現状と課題

浄土宗正覚寺副住職 鵜飼 秀徳

- *なぜお寺の数は県によって違うのか
- *人口減に悩む地方のお寺の実状
- *2040年の宗派別消滅格差
- *檀家の減少がお寺経営を直撃
- *マネーロンダリングに悪用される危険も
- *企業による支援も減少傾向に
- *政教分離で国の税金投入もない
- *お寺の消滅で地域コミュニティが崩壊
- *お寺再生への様々な試み
- *今に残る廃仏毀釈の影響



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

今日は京都の正覚寺の副住職をされておられます。鵜飼秀徳さんにおいでいただきました。鵜飼さんは成城大学をご卒業後、報知新聞で社会部の記者をされ、その後、日経BPに移られ、そこで記者、編集者をされた後、独立されました。現在はお生まれになった正覚寺の副住職をされておりますが、記者活動、編集者活動の中で寺院の経営や宗教についてのご本もお書きになっておられます。一方で地域創生という話もありませんが、地方にとって寺院の活性化も一つのキーになるということも書かれておられます。今日はそういったことを含めて幅広いお話を伺えると思います。それでは鵜飼さんよろしくお願いたします。（拍手）

なぜお寺の数は県によって違うのか

鵜飼 皆さんこんにちは。鵜飼でございます。本日は新型コロナウイルスで大変な中、ご参集いただきましてありがとうございます。

さっき京都から新幹線で参ったわけですが、京都は相変わらずインバウンドがすごいです。これだけ中国の団体客の出国禁止というのですが、京都駅周辺はあまり変わっていない感じがしました。

自己紹介をさせていただきますと、まさにインバウンドが参集をする京都の嵐山——嵯峨嵐山という言い方をしますが、渡月橋から歩いて5分ぐらいのところにある正覚寺というお寺の次男として生まれました。私のお寺のちょうど